



# 常楽寺の名宝

令和七年八月一日（金）～十二月二十五日（木）

開館時間 午前九時～午後四時

主催 常楽寺美術館

後援 上田市、上田市教育委員会、別所温泉観光協会、上田電鉄株式会社、株式会社上田ケーブルビジョン、週刊上田新聞社、信州民報社、東信ジャーナル社



ごあいさつ

令和七（二〇二五）年、北向観音と常楽寺は、開創千二百年を迎えます。

寺伝によれば、平安時代初期の天長二（八二五）年、常楽寺の裏山に火坑が出現しました。同年十月二十五日、比叡山延暦寺の慈覚大師円仁が朝廷の命によつて修法すると、火坑から紫雲がたなびき、火焰とともに金色の千手観音菩薩Ⅱ北向観音が飛翔し、北向山の桂の木の新梢に留まった、と伝えます。

慈覚大師は、千手観音菩薩の出現霊地に常楽寺を、北向山の桂の地に北向観音堂を開創。以来、常楽寺は天台教学の拠点として、北向観音は、現世衆生救済の祈願寺として繁栄してきました。

この記念すべき年、北向観音では前立本尊御開帳を開催し、本館では企画展「常楽寺の名宝」を開催する運びとなりました。どうぞお楽しみください。

## 企画展「常楽寺の名宝」展示作品の御案内

### 企画1 大般若経箱

「足利尊氏願経」の大般若経を納めるこの箱は、蓋身とも稜角の部分で帯状に一段削り込んで鍍漆をほどこし、黒漆を塗布するが、これは奈良時代以来箱や椀の類に行われた伝統的木工手法のひとつであり、防湿とともに装飾を兼ねた。箱の墨書銘により、経箱は大永七（一五二七）年八月、安房国（千葉県）大山寺の大般若経一部六百巻の容器として製作されたことが判る。銘文にはさらに、願主に加え大工・塗師など参画した工人の名も記している。

### 企画2 大般若経巻十一【写真 東京大学史料編纂所提供】

大山寺に伝来した大般若経で、版本四百四十四帖と写本百五十六帖が六合の箱に納められる。このうち巻十一（版本）には次のような願文が刻まれている。

大般若経一部六百巻／為宿願開板畢／観応三年九月十五日／正二位源朝臣尊氏

観応三（一三五二）年に源朝臣尊氏Ⅱ室町幕府初代將軍足利尊氏が記した願文で、「足利尊氏願経」と通称されている。尊氏は、自ら写経し、京や鎌倉の諸寺院に命じて一切経を書写させてもいる。

### 企画3 不動明王線刻鏡像

像は、右手に剣、左手に索を持って、火炎に包まれながら岩座上に坐る。まづ銅板に蹴り彫りの手法で像容を線刻し、裏から像容部分を打ち出して肉づけ

を行い、立体感を出している。こうした線刻打ち出し鏡像は、平安時代の末頃から流行し、本作の手法も古様であり、その先例となる遺品といえる。

#### 企画4 誕生釈迦仏立像

誕生仏は銅像が多いが、ヒノキの一材から彫出している。台座底面墨書の永雲寺、南都大仏師浄心の詳細は不明だが、本作は奈良時代の東大寺大仏開眼供養の銅造誕生釈迦仏立像の二分の一サイズの模刻で、細部まで忠実に再現している。この時期の東大寺は永祿十（一五六七）年の兵火で焼亡した大仏の復興期にあたり、山田道安によって大仏の顔が銅板で補修され、仮屋が建てられていた。墨書の天正二（一五七四）年四月八日は本像と復興された大仏の開眼という意味も含まれていると思われる。

#### 企画5 塩田陸奥守北条国時像

北条国時は鎌倉時代末の塩田北条氏の2代目で、父は極楽寺流の分流で塩田流始祖の北条義政である。国時は、北向観音堂などを修理したと伝わる。元弘三（一二三三）年鎌倉北条氏が新田義貞に攻められた時に、鎌倉に馳せ参じ、その折、死を覚悟して形身に刻んだ自刻の像といわれる。

#### 企画6 聖観音菩薩画像

高い台座と長身の観音が図面いっばいに描き出され、すらりとした姿勢や円満な顔付から、天平時代の彫刻を見て描いたと思われる。中世以来、観音信仰は全国的に広がり、西国三十三所札所をはじめ、著名な観音霊場を巡拝する風が盛んとなった。描線・彩色とも着実である。

#### 企画7 如意輪観音菩薩画像

岩座上の月輪中に如意輪観音像を表し、その下方には山中に修行する僧と、それを二鬼神形が礼拝する様を表す。僧形は、西の比叡山と称される岡山県の書写山円教寺の開山、性空上人（九一〇―一〇〇七）を表したものと思われる。如意輪観音は、性空の弟子・安鎮が同寺に開いた如意輪堂の本尊と考えられる。

#### 企画8 天台大師画像

中国の天台大師智顗（五三八―五九七）は、天台法華の教義を学び、天台山にあって大乘經典を宣布した。その教えは中国仏教の最高峰と仰がれ、「震旦（中国）の釈迦」とも称された。描いた吉山明兆（一三五―一四三二）は、南北朝から室町初期の京都東福寺の僧で、宋元画を学び、強い墨の描線と濃い色彩も調和させた人物画を得意とした。

#### 企画9 絹本着色綱敷天神像

御開帳特別展示

政略により、京の都から九州太宰府に左遷される菅原道真を描く。都を下る船中で、数物もなく、舟を係留する綱を敷く、無念と怒りの表情である。それでも束帯姿で笏を執り、威儀を保っている。背景に梅の枝を配する描写は巧みであり、とくに面貌の細墨線による肉線や表情は優れている。

#### 企画10 絹本墨画布袋・花鳥図

御開帳特別展示

狩野探幽の墨画は、桃山時代の豪壮な画風から一転し、余白を大胆に取り入れた、瀟洒で洗練された画風を特徴とする。描かれた対象の周りに広々とした余白を設け、空間の広がりや奥行きを表現し、かつ、墨の濃淡を巧みに使い分けることで、遠近感や光の加減を表現している。

#### 企画11 算額

斎藤善兵衛は、上田市に生まれた関流数学者である。関流始祖の関孝和は、江戸時代前期―中期の和算家である。筆算式の代数学や方程式の研究、行列式の発見、円に関する数式の樹立など、日本独自の数学である和算を確立した。この絵馬は文政十一（一八二八）年に善兵衛が奉納した体積を求める額である。

#### 企画12 観音の歌

加舎白雄は、元文三（一七三八）年、上田藩士の家に生れる。松尾蕉風の世界を正統に継承しているといわれ、正岡子規は「安永・天明期における老子」と評している。諸国歴遊の後、上田に帰り、江戸と上田を往来しながら俳諧の道に精進する。小林一茶にも大きな影響を与えたともいわれる。

#### 企画13 紅葉狩

葛飾北斎は八十四歳と八十七歳の二回、信州小布施に滞在したといわれ、この図はこの頃の作と思われる。常楽寺や戸隠に伝わる「鬼女紅葉伝説」の一場面で、鬼女の面相といい、平維茂の手足の筋肉の盛り上がりといい、北斎独特の線描で、鬼気迫るものが感じられる。

#### 企画14 井岡山之頌

中国の長江南岸に聳える井岡山と山上の記念碑を描く。一九二七年毛沢東が拠点を築いて以来、革命聖地となっている。本作は、古い山水図の画法・形式とは異なり、構図や山・樹木の描き方も実景からきている。製作技法は「抱石皴」という抱石独自のものである。中国水墨画界で最高の評価を得た抱石の遺作で、常楽寺本堂の襖絵を描いた抱石の子傳益瑤との縁で当寺に奉納された。

## 企画15 16 騎象普賢菩薩像・騎獅文殊菩薩像

釈迦の右脇侍である文殊菩薩が獅子に乗った姿と左脇侍である普賢菩薩が白象に乗った姿を描く。棟方志功は、昭和四十七（一九七二）年、たまたま訪れた常楽寺で半田孝淳と出会い、石造多宝塔に感激し、孝淳に戒名を依頼する。そんな縁から、常楽寺には本作のほか、十点余りの志功の書簡や作品が伝わる。

## 企画17 劉備壇溪渡河図

題材は中国の「三国志」による。劉備と愛馬の驢が一体となり、檀溪の激流に飛び込むとする一瞬の場面を描く。画面は右上から左下への斜め構図で、動きのある人馬一体の描写はみごとである。目を閉じ天運にまかせる劉備の表情、荒れ狂う激流の彼方をみつめる驢の不安げな眼は印象的である。さらに檀溪の激流、波頭の表現などは、北斎の技法に共通する点が認められる。

## 企画18 聖観音菩薩画像

半田孝海が、延暦寺から拝領したものと伝える。宝石を散りばめた豪華な冠を載せ、左手に蓮華を執り、右手は膝上に垂れ、結跏趺座する聖観音菩薩を描いている。頬張りの強い丸顔、やや厳しい表情を示す目鼻、引きしまった口もと、また体部の的確な表現など、全体に緊張感と迫真感があふれ、剥落や後世の補筆がなされているが、鎌倉時代の仏画の特徴をよく示している。

## 企画19 愛染明王画像

愛染明王は、平安時代初期に日本へ伝えられた。当初は息災延命の仏として、中世以降は縁結び、近世からは恋愛の本尊として庶民の信仰を集めた。全身の赤色は愛欲煩惱をあらわし、頭上に獅子頭の冠をのせ、憤怒相を表し、六臂に持物を執っている。周囲も赤く彩られ、火焰が金泥で描かれる。本作は、色彩が鮮やかで多彩である。制作年代は表現様式から室町時代後半とみられる。

## 企画20 藤娘と鬼の念仏

窪俊満は江戸時代後期の浮世絵師である。本作品は肉筆画であることから、天明末期から文化期（一八〇四～一八一八）に描かれたものと考えられる。二人の人物は、大津絵の主題である「藤娘」と「鬼の念仏」で、藤娘に寄りかかれて大きく目を見開いた鬼の念仏の表情からは、照れて所在なげな心情が伝わる。

## 常設展 展示作品の御案内

### 常設1 北向山厄除千手観世音火坑出現図

火坑から光明を放ちながら飛翔する千手観音出現の場面を描く。千手観音は北向山の桂の木に留まり、衆生救済の誓願をたてた。石亭竹本興は、旧幕臣の日本画家で、明治十四（一八八一）年七月別所温泉萬山楼に滞在していた。

### 常設2 別所北向観音像下図

荒井寛方は、昭和十五（一九四〇）年、法隆寺金堂壁画模写事業の主任画家に選任・従事した。軽井沢で孝海と出会い、鬼女紅葉伝説を「常楽寺縁起」として全十六面に完成させた。本作は、その折り描いた北向観音の下絵である。

### 常設3 慈覚大師円仁坐像

北向観音・常楽寺開祖の慈覚大師円仁の像である。本像は、上州板鼻町（群馬県安中市）仏師の制作で、胎内墨書に「上州板鼻宿／定朝四拾三代京仏師」と記される。これを名乗る仏師は、市内に他例があり、名を「田中兵助」とする。

### 常設4 紺紙金銀字交書華嚴經断簡

紺色の染紙に銀泥で界線を引き、金泥と銀泥で書写した經典の断簡で、『華嚴經』六十巻本の第十巻第五行目にあたる。紺紙金銀交書の例は、東大寺正倉院文書にもみられ、奈良時代頃から存在していたことが知られている。

### 常設5 法華經

福岡県の四王寺跡から出土した経筒に納められた法華經と伝わる。細かく詰まった速書きの文字は、末法の終末観、あるいは極楽か地獄かという臨終観からくる切迫感を感じさせる。

### 常設6 銅鑄製経筒

平安時代後期、全国で盛んに経塚が造営され、書写された經典を納めた経筒が埋納された。この経筒は福岡県出土と伝わり、畿内以外では、北部九州で経塚造営が流行している。

### 常設7 阿弥陀三尊立像

いわゆる善光寺式阿弥陀如来三尊である。下方の男女は、インド毘舍離国の月蓋長者と如是姫親子で、月蓋長者は釈迦の教えを聞こうとはしなかったが、娘の如是姫が大熱病となるに及んで釈迦に救いを求め、釈迦は西方浄土の阿弥陀如来に祈るように諭し、そのおかげで病が治ったという説話にもとづく。

## 常設8 観音經浄土曼陀羅図(当麻曼茶羅)

天平宝字四(七六三)年作の奈良県当麻寺の国宝当麻曼茶羅図の縮小模本である。中央に西方極楽浄土、左側に阿闍世太子の惡逆物語、右側に浄土世界の観想手法、下方には九品往生が描かれる。依田学海の「常楽寺浄土曼多羅記」によると、明治の初め、天台宗務を東京に移す議論が起こった際、常楽寺五十三世義達が紛議を収束させた功によって、天台座主から贈られたという。

## 常設9 阿弥陀如来立像

頭体幹部はヒノキの一材製で前後に割刳ぐ。肉髻が低く、髪際がゆるくカーブするのは鎌倉時代の特徴である。右胸前に覆肩衣のたるみを表わして、下腹部にU字の衣文を繰り返し、両脚部に対称の双曲線を配するのは、快慶の安阿弥様の形式である。江戸時代補作の厨子の扉左右には善導と法然が描かれる。

## 常設10 地藏菩薩立像

本像は近年まで將軍塚前の七苦離地藏堂の本尊であった。現在の玉眼は後世に嵌入されたもので、当初は彫眼であったと考えられる。顔の各部位が下方中央に寄っていて、若い端整な顔つきである。肉身の起伏は滑らかで、体の奥行きも極めて薄く、衣文線も浅く穏やかで、平安時代後期彫刻の特徴を示す。

## 常設11 不動明王立像

岩座に俱利迦羅竜の巻きついた剣を執る不動明王と衿裾羅・制多迦二童子が立つ。不動が開目でありながらその瞳が一方は天、一方は地に向く天地眼に表されている点も面白い。岩座の隅や衿裾羅の肉身など、一部に補彩があるものの、室町中期の作例である。

## 常設12 五大尊像

中央に不動明王、向かって右下に降三世、右上に軍荼利、左上に大威徳、左下に金剛夜叉の明王を配した五大尊(明王)図である。五大尊は公家や宮中の修法に多く用いられた。古来は、各尊とも独立の画幅に表されていたが、時代が降るにつれて併せて描くようになった。室町中期を降らない作品と思われる。

## 常設13 名誉十八番紅葉狩

「名誉十八番」は、江戸時代の歌舞伎俳優七代目市川團十郎が定めた十八演目「歌舞伎十八番」の別称である。本作は、その一演目「紅葉狩」の名場面、鬼女が平維茂を襲う直前の一瞬を描いている。右田年英は、明治から大正時代にかけて、浮世絵を後世に残すために尽力した、心意気のある浮世絵師である。

## 常設14 平維茂 戸隠山鬼女退治之図

妖しげな笑みの紅葉の顔は、水面に鬼の表情として映る。紅葉の正体に気付いた維茂は静かな表情で臨戦体制に入っていく。作者の月岡(大蘇)芳年は、右田年英の師で、歌舞伎の残酷シーンや「戊辰戦争」の戦場等を題材にした無残絵から「血まみれ芳年」とも呼ばれる。

## 常設15 慈眼視衆生

法華經普門品の言葉で、観音の眼は半分開いて半分は閉じている。開いた半分は、慈悲の眼であり、閉じた半分は、常に内省している眼といわれる。半田孝海(一八八六〜一九七四)は、宗教家として日本の戦争を止められなかった悔恨から、人道支援と核兵器廃絶に全身全霊で取り組んだ。

## 常設16 道心之中有衣食

この名号は、仏道を究めようとする心があれば、生活は自ずと成るもの、という伝教大師最澄の言葉である。孝淳(一九一七〜二〇一五)は、孝海の長子として生まれ、昭和三十六(一九六一)年に常楽寺住職、天台宗探題・曼殊院門跡門主を歴任し、平成十九(二〇〇七)年に第二五六世天台座主に就任する。

## 常設17 徳川家康日課念仏

家康は浄土信仰に篤く「南無阿弥陀仏」の六字名号を日々書き連ねた。三紙、六段、各段百十一返で、六百六十六返を記している。第二紙末に「慶長十七年六月九日家康」(二六二年)「八月十七日家康」などの記が見出される。

## 常設18 金銅盤・五鈷杵

盤は大壇や密壇上において五鈷鈴と五鈷杵、三鈷杵、独鈷杵を安置する台である。本件は、古い形式を追っている鎌倉時代の作と思われる。五鈷杵は、密教法具の金剛杵の一種で、本来はインドの武器であり、仏教では煩惱をやぶり、仏性の智光を表す意味で用いる。室町時代の作と推定される。

## 常設19 金銅六器

六器は仏前供養の器で、高台のついた小碗に台皿を備え、六個を一具とする。この六器は銅製で装飾を施さない素文であるが、口縁部がやや開ききみで、形式化がみられ、鎌倉時代末から室町時代にかけての作と推測される。

## 特別展示 十不二門文心解【写真金沢文庫提供】

正応五(一二九二)年信乃(濃)国塩田別所常楽寺書写との奥書があり、常楽寺の存在が具体的な年紀をもって歴史上に表れた貴重な史料である。